

未知の世界の不安もありますが楽しみもあります

高橋 日出夫さん(関根・松塚)



「毎日作物を見られるのがうれしい」と話す高橋さん

を村に要望しました。高橋さんが設置を要望したのは花き栽培用のパイプハウス3棟と育苗用ハウス1棟。「ハウスを自分で貸してもらって、うれしかったです。避難して3年目に農業ができるようになって良かったと思います」とハウスを見ながら話す高橋さん。定植したばかりのトルコギキョウの苗にも「毎日作物の顔を見られるのは農家として本当にうれしいですね」と、目を細めています。

今年から本格的に営農を再開する高橋さん。「まずは、人並みの物を作って出荷したいです。ここで言う農業は未知の世界。どんな花ができるのか、不安があります。それを克服する楽しみもあります」と避難先での農業再開に意欲を燃やしていました。

農業は楽しくやりたいです

早坂 清昭さん(小宮)



ストックの収穫が始まった早坂さん(右)と妻の国子さん

震災前は兼業農家としてトルコギキョウの栽培などを行ってきた早坂さん。震災後は、妻の国子さんの実家がある南相馬市原町区に避難し、農地を借りてその年からトルコギキョウとストックの栽培を始めました。「初めはハウス2棟を設置しました。毎年、1棟ずつ自分たちで増やしていこうと考えていました。そ

の時は村からの施設の貸与の話もなかったのですが、自分たちでできる範囲でやろうと思っていました」と話す早坂さん。その甲斐もあってか、昨年のトルコギキョウは高値で出荷することが出来たということです。「それでも、ゼロからスタートするのは大変だったので、この事業があつて助かりました。最初にハウスを設置した場所が、水の便が悪かったのでなおさらです」。

パイプハウスが完成したのは今年に入ってから。できたばかりのハウスに冬期栽培のストックを移植して、4月中旬ごろから出荷が始まりました。「避難生活とはいえ、体を動かさないとね。意欲がないといけないと思います。農業は、楽しくやりたいです。何もしないでは、前に進めないですね。一日でも早く、農業で復興したいです」と笑顔で話していました。

植物に関わる仕事をし続けたいです

菅野 慶一さん(関根・松塚)



トルコギキョウの苗を定植する菅野さん

農業短期大学で農業を学び、ゆくゆくは家を継ぐつもりで村に戻り、震災前は露地のリンドウ栽培を行っていた菅野さん。一時は西会津町に避難し、キュウリ農家の手伝いを行っていました。「そろそろ福島に戻ろうと思っていたところ、村役場の農政係から、若い人を雇いたい人がいるという話を

聞いて福島に戻ることを決意しました」と話します。今年の4月から、福島市荒井地内に、復興交付金事業でトルコギキョウなどの花き栽培用パイプハウス等10棟を導入した、赤石澤忠則さんのもとで雇用されています。

菅野さんは、村で農業をしていた時から、将来的には施設栽培も行いたいという思いもあり、赤石澤さんのもとでは「いい勉強です。植物に関わる仕事がしたいという思いがありましたので。体も慣れているし、苦労なくできますね」と仕事を楽しんでます。しばらくは赤石澤さんのもとでトルコギキョウの栽培を勉強し、いずれは「畑の条件や住む場所の条件などが整えば自分でも避難先で農業をやりたいと考えています」と話していました。

土いじりを楽しく続けていきたいです

田村 茂さん(上飯樋)



「農業は生きがい」と話す田村さん

震災前までは、1.5ヘクタールの葉たばこや水稲、小松菜の栽培をしていた田村さん。原発事故で避

イプハウスを設置して、村でも栽培していた小松菜をつくりたいと思いましたが、収入の上がるものをやることにしました。紹介された農地が福島市荒井で、この辺りはコギク栽培が盛んなんですね。それで、コギクの栽培を勧められました。初めての作物なので、毎日心配しながらですが、楽しんでやっています。こちらのコギク部会長が詳しく教えてくれるのも助かります」。

営農再開についての思いは、「今までずっと続けてきた農業だから、土いじりを続けていきたいですね。何よりも、楽しくやっていたいです」と、農業を生きがいとして楽しんでいる田村さんでした。

●避難先で営農再開を希望される方は、復興対策課農政係までお問い合わせください。
☎024-562-4700